

「物質化した都市」を再生するための 緑の活用法



㈱チームネット 代表取締役 甲斐 徹郎

1. はじめに

ヒートアイランド現象に代表されるような都市における環境問題と、「家族間の事件」、「ひきこもり」「独居老人問題」などの都市におけるコミュニティ問題とは、これまで別の分野として扱われ、それぞれを結びつけて議論されることはあまりなかったのではないかと思います。切迫した現代の都市問題を解決していくためには、私は、「環境」と「コミュニティ」とを、同一の次元で捉えることが重要であると思います。そして、その解決の決め手として、緑が重要な役割を担うだろうと思っています。

その観点から、都市の環境再生のあり方を考えてみたいと思います。

2. 「環境問題」と「コミュニティ問題」との共通項は「関係の省略」

かつての日本の住まいは、地域全体の「環境」との一体感を保っていました。そのことは、伝統的な集落の美しい街並みを見れば、一目瞭然です。かつての住宅には、自らの生活を外界と切り離して成立



写真1 沖縄・備瀬の集落



写真2 現代の沖縄の住宅地

させる術がありませんでした。そのため、外界との「つながりあう」技術が洗練され、あの美しい街並みは生みだされてきたのです。

たとえば、沖縄の本部半島にある備瀬という集落の航空写真(写真1)を見てみると、集落全体が森に囲まれ、ひとつの生き物のような豊かな環境が形成されていることがわかります。この環境は、一軒一軒の家が、それぞれの宅地の四方を高さ5~6mの樹木によって生垣のように囲み、そうした宅地が約300並び連なることで形成されています。

こうした豊かな環境が生まれた背景には、台風対策がありました。備瀬の集落では、建物全体を樹木で包み、さらに隣の住人とも協調し合いながら、街全体を防風林で囲むことで、台風の猛威から自分たちの生活を守ってきたのです。

一方、沖縄の現代の住宅地(写真2)と比べてみると、そこには、全く緑が見られず、備瀬のような豊かな全体性がなくなっています。その理由は、いたって簡単で、沖縄では60年代頃から住宅がコンクリート化され、住宅が強固になったために、台風に対する備えとして樹木を植える必要性がなくなったのです。

このように、かつての日本の個人の生活は、地域の環境と深く結びついていて、同じ地域の住人にとっては、地域の環境は共通した生活基盤そのものでした。こうした共通の利害に結びついた地域の環境を整え合う関係が、地域のコミュニティを機能させてきたのです。

ところが、現代の都市における住まいは、地域の環境とは独立した存在となりました。その結果、都市における環境は、もはや、その住人にとっての共通した利害対象ではなくなり、住人同士が互いに関係を大切にすることの意味が小さくなり、やがて、

コミュニティは崩壊することになります。

3. 「関係の省略」が招く「都市の物質化」

個人が自分の生活の中で地域の人や環境との「関わりを持つこと」の必然性が失われたことが、「環境問題」と「コミュニティ問題」を招いている原因であることを指摘しましたが、このことを別の視点で見ようと思います。それは、「複雑系」という視点です。

「複雑系」とは、複雑な全体が、個と個との単純な関係の連鎖によって生まれるメカニズムのことを言います。そのメカニズムを示す例として、鳥の編隊飛行の話が有名です。

それは、一羽の時はまったく勝手に飛んでいる鳥が、複数集まるとあたかもひとつの生命体であるかのような見事な編隊飛行が生まれるメカニズムを、コンピュータシミュレーションによって解明したという話です。このシミュレーションでは、独立した個々の鳥に対して、他の鳥との関係の取り方について、3つの単純な規則を与えれば、編隊飛行は再現されるということがわかりました。

その規則とは、「群れの方向に飛ぶ」「近くの鳥とスピードを合わせる」「近づきすぎたら離れる」という簡単なもので、その関係のルールを与えておくだけで、あたかも「集団の意志」があるかのように、一定の秩序をもった全体性が生み出されたのです。

こうした研究によって、個と個が一定の関係性を保つことで、個の自発的な活動を通して秩序をもった全体が形成されるという特性が、自然界や人間の社会行為の中に広く見出されることがわかりました。そして、それが、「複雑系」と呼ばれるメカニズムです。

この「複雑系」のメカニズムに則して、もう一度、沖縄の伝統的な集落(写真1)と現代の街並み(写真2)とを比較してみると、「関係の省略」が街の構造を大きく変えてしまう理由がよくわかります。

つまり、高度成長期前の日本の住宅は、周囲の環境との「関係」が生活を成り立たせていました。集落の一軒一軒の住宅が、その「関係」を維持することで、「複雑系」のメカニズムが作用し、集落全体がひとつの生物のような調和の取れた豊かな環境を創

り出してきたのだと捉えることができます。

ところが、高度成長期以降、日本の住まいは、進化した技術で装備され、室内に閉じこもってスイッチひとつで快適さを得られるような生活が可能になっていきました。その結果、都市を構成する個々の住まいは、完全に自己完結化してしまい、こうした「関係」の欠如が、「複雑系」としての全体性を生み出せない構造となってしまったのです。

このように、個々の暮らしの単位が相互に影響を及ぼしあう「関係」の有無が、都市の構造を大きく変えてしまうことになります。「関係」は、個々の暮らしの単位を生きた細胞のようにふるまわせ、そのふるまいが生命を有したような有機的な全体を形成しますが、「関係」が欠如してしまった状況では、都市は無機的な物質と化してしまうのです。

すなわち、「環境問題」と「コミュニティ問題」の本質は、個々の暮らしの単位相互の「関係」の欠如によって生まれた「都市の物質化」であると言えます。

次に、この「都市の物質化」をどのようにすれば変容させることができるかを検討したいと思います。

4. 「樺ハウス」の試み

技術の進化により住まいの自己完結性が高まると、暮らしの場における周囲の環境や人と「関係」を保つことの必然性が失われ、その「関係」の欠如が、都市全体の物質化を招きます。

「都市の物質化」を変容させ、都市環境を再生させるためには、全体を構成する個体間の「関係」を再生させることが重要となります。

では、「関係」の再生をどのように進めるか。技術の進化により利便性を享受できるようになった現代人にとって、「関係」を省略できる暮らしは、個人主義を謳歌できる自立したライフスタイルをもたらしました。そのような現代人にとって、「関係」は煩わしいものとなってしまいました。都市環境の再生のために必要なことは、実は、そうした煩わしい「関係」を、個々の暮らしの中に再登場させることなのです。そのためには、どうすればいいのか、それを実現させた試みとして、2003年に完成させた「樺ハウス」というプロジェクトを紹介します。

「樺ハウス」で「関係」を暮らしの中に再登場さ

せるためにとった手法は、建物周囲の環境との「関係」をデザインすることで、体感的な快適さを追求するということでした。

「櫛ハウス」の計画の特徴を表したのが図1です。ここでのポイントは微気候をコントロールするというものです。微気候とは、樹木や建物やアスファルトなどのその場所の条件によって生まれる局所的な気候のことをいいます。

たとえば、真夏の晴れた日に、コンクリートのビルに囲まれたアスファルトの上にいるのと、日比谷公園のような大きな樹木に囲まれた芝生の上にいるのでは、それぞれが同じエリアにあっても、明らかに「体感」的な心地よさは異なります。こうした局所的な条件によって生まれる気候のことを微気候といいます。

つまり、「櫛ハウス」では、こうした微気候を意図的にコントロールするように、緑の環境が整備されているのです。そして、外環境と室内空間とのつながりをデザインすることで、室内での良好な体感が生まれるように計画され、その結果、クーラーに頼らなくても快適な室内環境が形成されています。

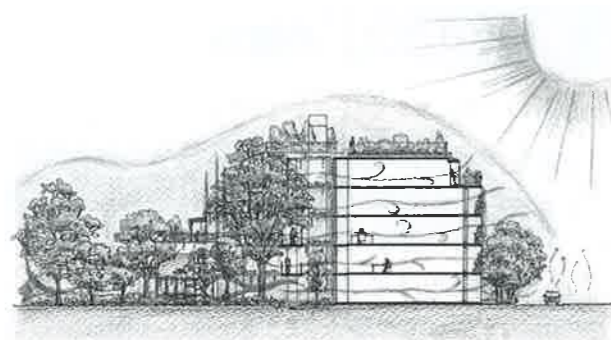


図1 「櫛ハウス」における微気候概念図

5. 「関係」の再構築による都市緑化の推進

こうして、「櫛ハウス」では、暮らしを取り巻く環境との「関係」をデザインすることで、体感的な快適さを創り出しました。

「関係」を必要としないことで、煩わしさから解放された現代人にとって、もう一度「関係」を再構築させるためには、私は、こうした「体感原理」に基づいて、「環境」をそこに暮らす人たちにとっての共有の価値として位置づけるプロセスが重要であると

思います。

実際に、「櫛ハウス」のような住まいづくりの実践を通して培ったプログラムを、緑のまちづくりに応用する形で進めているのが、(財)東京都公園協会による、「まちなか緑化活動支援事業」というものです。08年から杉並区久我山、台東区浅草、09年から中野区中野（桃園町会）で、それぞれモデル事業を実施しています。

この事業では、民有地での緑化を推進させるために、「体感原理」をベースに、住民と緑環境との「関係」づくりを導き出すプログラムが実践され、大きな成果を生み出しつつあります。そのプログラムは、約3ヶ月間に渡り、3回のセミナーやワークショップによって構成されています。そのプログラムを紹介します。

第1回目は、「体感セミナー」です。第1回目のプログラムのポイントは、決して「みんなでまちづくりをしよう」とは言わないところにあります。先に指摘したように、多くの人にとって共通した意識は、「みんなで」と言ったとたんに煩わしく感じてしまうことです。ですから、まず「自分にとって得なこと」から始めます。その「得なこと」とは、「体感原理」に基づいた緑の活かし方です。個人個人の宅地内でどのように樹木を配置すれば、体感的な快適さが得られるのかを、体感実験を組み込んだセミナーによって体得するのが第1回目です。

参加者の中には、緑の管理が大変だから樹木は植えたくないと思っている人もいます。しかし、このセミナーに参加すると、樹木を植えたくないという気持ちが変わります。その決め手は、「まずは、自分のため」ということと「体感」です。実際に「体感」させるこの手法は、理屈抜きに「こっちの方が快適でお得だ」という気づきを促す上で大変有効なのです。

第2回目は、「宣言ワークショップ」と呼んでいるものです。これは、ブレインストーミング法によって参加者それぞれが何を取り組みたいかを探り、その内容を整理し、最終的には「自分は、緑を活かして、〇〇を実現させます」といった形式でそれぞれの参加者に宣言をしてもらうものです。そのことによって、参加者に、「自分が緑化推進主体である」という意識を形成させることが目的です。

そして、第3回目が、「デザインプレゼンテーショ

ン」です。これは、2回目の宣言内容をもとにしてガーデンデザイナーによって仕上げられた緑化プランを提示する場面です。自分たちの思いが絵となって提案されますから、おのずと場が盛り上がります。

そして、次の瞬間がメインイベントで、個々の絵をつなぎ合わせて完成させた街全体の絵を見せるのです。このプロセスが重要で、個人個人の取り組みが連鎖することで街全体が変わることをイメージさせると参加者の意欲は社会化されたものに昇華されます。

このように、プログラム第1回目のスタート時には「自分のため」であった個人の意識を、「私たちの力でまちを変えよう」といった意識に高めることが、全3回のワークショップの重要な流れです。

こうしたプロセスを経て、いよいよ緑化施工を行います。桃園町会では、09年の初年度で10件の緑化が実施されることになりました。桃園町会は約600世帯で構成されています。その中で10件という数は少ないように感じますが、重要なのは数ではなく、「関係」の深さにあります。10件の緑化を実施した人達と街との「関係」が深ければ、複雑系の原理に従って、「関係」が次なる「関係」を育て、自己増殖を始めます。



写真3 桃園公園での食事会「緑の茶屋」の様子

写真3は、この街の中心にある小さな公園で行われた食事会の様子です。こうした緑を共有の価値としてみんなで生活を楽しもうという動きが、住民発意で始まっています。

民有地の緑化を誘導しようとする場合、公的な助成によって達成できる緑化の数量的な効果には限界があります。重要なのは、数ではなく「関係」のタネづくりなのです。

6. まとめ

都市の環境再生は、難しい話ではなく、単純化すれば、個にとってどちらが心地よく、贅沢かということ、身体感覚に立ち返って検討すればいいということになります。

「心地よさ」を生み出す源泉が「関係」です。そして、個の「関係」は、複雑系の原理によって全体を形成します。こうして「関係」は、「環境問題」と「コミュニティ問題」を同時に解決させる重要な鍵となるのです。

「関係」の始まりは身体的な「体感」です。そして、緑には、その身体感覚を奮い立たせる潜在力があります。都市における「環境」と「コミュニティ」の再生の決め手は、この緑の潜在力を顕在化させ、「物質化した都市」に生命を吹き込むことだと思います。

(かい てつろう)